

図書館だより

89. 1

日本最初のカトリック週刊紙

「光明」

札幌 光明社 発行

創刊 1916. 1. 2

終刊 1968. 12. 29

(紹介記事は6ページにあります)



目次

新春随想		資料紹介 「光明」	6
舞踊的体験 川端ひろ子	2	藤に咲く花 12 月下美人	8
生化学の教科書から 後藤祐子	3	お知らせ	8
密室空間 本居宜長の宇宙 村井紀	4		

舞踊的体験

川端ひろ子 (体 育)



10年間の劇場公演に句点を打ち、舞い踊れる所は総てが劇場よと、海・川・山・森・原野・遺跡・町・路上などで春夏秋冬、好天悪天にかかわらず楽しみ始めて3年。どの季節も個性的で魅力あるが、雪と寒さを従え、すべての贅肉を取り去って毅然と自己主張する冬のすさまじさは格別に魅力的だ。年明け早々、札幌芸術の森・野外美術館で念願の舞展を開くことにした。それぞれの気魄に満ち完成された彫像とどう責めざ合い闘い抜き融合してゆくか、試作に試作を重ねている。一つ大きな問題がある。いつも裸足で大地を踏みしめ踊っているのに、雪の上でもと今年の2月に試みた。当然のことながら足は冷たさを通り越して痛みが変わり、足の甲に付着した新雪は、特に石にでもぶつけたようないたさから、やがて感覚の鈍磨へと移行していった。肉体の過酷な状況下では表現意志とは別に、舞い踊る速度が早まり、雪との接触を避けようと片足になったり、爪先立ちになったり、跳び上がったたり、転がるなど危険から身を守る本能の表出に軍配が上がった。足は凍傷第2度の水疱と、それに伴うジンジン痛で抗議し、3週間後にペロリと皮を剥いて笑った。雪は私を拒否したと思っていたが、唯唯、雪だったのである。この体験をもとに、作品を充分表現しうる防寒装備をするか、裸足で狂うか迷うところである。さてさて、当日の天候はいかに、荒天決行。

「虚飾」 5月・桜まつり路上パフォーマンス

大姥百合をくわえた口から涎れが下がり、乾いた眼球の保護にと涙腺が機能し始め、余分な

水分は鼻腔とほほへと流れ出す。踏んばっている裸足の裏とアスファルトとのわずかな隙間も徐々に圧迫され、膝が硬ばり、ゆるみを失った腰は安定を求めて微動しはじめる。それを感じた肩は静止しようと力む。呼吸は浅く、いらだってくる。作品の主題と同様、虚飾の下に見えるかくれする本性。故・土方巽の舞踏とは命がけでつつ立っている死体であるとの片鱗を偶然体験する。前の出し物が興に乗ってまだまだ続く。覚悟するか、無限につつ立つことを。



「祭文」 7月・小樽防波堤にて

堤長1000m、いたどりを両手でかけながら舞い、渡御する。釣り人約20名。

何してるの — 踊っているの

何で踊るの — 魚が沢山釣れるようにと願って
そうか、しっかり頼むぞ — まかせて
それから女9人、間もなく神がかりした。

生化学の教科書から

後藤祐子 (調理学)



学生時代に用いた教科書の中にレーニンジャーの『生化学』という本がある。千数頁からなるこの本は見ただけで読む気がなくなりそうな分厚い本で、しかも英文で書かれている。英語の不得手な私にとってこの授業の予習はかなりの労力を要し、四畳半一間の下宿で炬燵にもぐりながら、訳本を傍に夜を徹してこの本を読んだことは学生時代の思い出の一つになっている。しかも受講者が二名というこの授業は、私達が必死で予習して行ったにもかかわらず進行速度が遅く、いまだに私はこの本を最後まで読み終えてはいない。まだ読み終えていない本を話題にするのもどうかと考えたが、仕事の目標を見失いそうな時、自分を勇気づけたいときに開く本なので少し紹介したいと思う。

この本の著者であるアルバート・L・レーニンジャーはアメリカの生化学者で、教科書にすることを目的にこの本を書いているため、内容は概ねタンパク質の構造がどうのとか、エネルギーの生産がこうのといった生物の教科書のようなものである。しかし序章の中には生化学の研究に対する彼自身の考えが述べられており、本書はその考えに基づいて書かれているのである。

Living things are composed of lifeless molecules...生きものは生命のない分子からなる...という書き出しで始まるこの章には生命の神秘性が描かれている。生物を構築している生分子は一つ一つをとってみると生命を持たない分子と同じ性質を持っているが、その生分子が集合して生物となった時、それは無生物とは全く違ったものになる。無秩序の中から生まれた生物はそれを取り巻く環境の中から自己に必要な要素を取り込んで、複雑で秩序正しい集合体を造り出していくのである。そしてエネルギー

を生産(変換)し、そのエネルギーを利用して活動し、自己を複製するのだ。レーニンジャーはこの生物の営みを理解しようとする時、“化学”だけでなく“超化学”的な考え方が必要だと述べている。確かにそうかもしれない。生きているものには必ず死が訪れるが、死の直前と直後では何が違うのだろうか。宇宙ができる以前、エネルギーの塊が爆発を起こして物質が生まれ、その物質から生命が生まれた時、何が起こったのだろうか。これこそ超化学でしか説明のつかない永遠の謎ではないだろうか。そしてこの謎を化学の力で、限りなく超化学に近いところまで追求していくのが生化学という学問なのだろう。

また分野は様々に分かれてはいても研究とはそういうもので、いろいろな謎(すぐに解き明かせるものもあれば、永遠に分からないこともあるが)を自らの手で解明していくことなのだ。そして一つの謎を解くとそこからまたたくさんの謎が生まれ、研究をすればする程謎は増えていく。それでも人間は謎を解き明かしたいと思うのである。何かのはずみで生まれてしまったのかもしれない生命は、今自分で考え、知りたいたいと願い、それを追求していく能力を身につけたのである。一つの生命を持つ者のはしくれとして私も自ら考え、創造し、探求していきたく、無限に存在する謎の一つでもいいから自分の手で解き明かしてみたい。私はレーニンジャーの『生化学』を読んでこのように考え、現在に至っている。

本には不思議な力がある。会ったこともない人の意志が伝わり、感銘を受けることができるのだ。このレーニンジャーの本にしても、私は一度も会ったことがないのに彼の考えに共感し、(5ページへ続く)

密室空間 本居宣長の宇宙

村井 紀 (国文学)



井原西鶴の『好色一代男』(1682)が『源氏物語』の翻案・書きかえであったことはよく知られている。平安貴族の物語を西鶴は都市の「廓」にもなぞらえて、都市ブルジョワジーの物語に書き改めたのである。それから約百年経つと、商才に乏しく歌文ばかりに夢中な男が、母のいうまま京都へ出て町医者となり、やがてこの物語を都市空間のロマンに読みかえる。本居宣長という男である。かれは、一群のエッセイで「ものあはれ」を説いて、この古い平安の恋愛物語には、男女のあり方、感情生活のすべてが、すでに書きつくされていると言いつつ、『源氏物語』こそは、日本の文学が世界に誇る最古・最大のロマンという物語がはじまるのである。その一方、『古事記』という得体の知れない古文書についても、実は世界を根拠づける書物だといひ出すのだ。この世界は神々の意思によって生成しており、「古伝説」のままに、現実には存在しているというのである。『古事記』をいわば“聖書”として、そこから人間の営みを見るというのである。

二つの“絶対の書物”(ボルヘス)を見いだす宣長。そのかれは天明2年(1782)53才の年末、風変わりな二階を増築(改築)し、四畳半を設け、そこを鈴屋と名付けている。興味深いのはその二階に通じる八段の階段を、奇妙にも下三段分だけは自在にとり外せるようにしたことである。一般にこのことは「学問に専心するための用意であるといわれている」(城福勇)のだが、城福氏の慎重な表現にも示されるように、これは相当奇妙である。というよりも、宣長がこのような仕掛けを作り、密室空間に閉じ籠ったこと、これはむしろトポロジカルな、そして精神的な“事件”だと言った方がよいのかもしれない。日本の精神空間はしばしば方丈が単位である。

茶室から“二階の下宿”まで、(もっとも、明治の東京のそれは六畳間だが…)『方丈記』から『四畳半襖の下張』まで、隠された内面が表われる場所である。そして、前田愛が言うように「伝統的な日本の住宅では二階に通じる階段は廊下や部屋の片隅にかくされているのがふつう」であり、二階は西洋の屋根裏部屋にも似て「隠し部屋のおもむき」をもった「<内>のなかにあるもうひとつの<内>」である。ところで、前田氏は「日本の二階は、西洋の屋根裏部屋のように孤独な隠れ場所でありながら、一方では階下の世界とも緊密につながとめられている」といっているが、鈴屋の仕掛けは、この「緊密」なつながりを自在に、つまりは一方向的に切断するのである。私の考えではここには宣長の“独創的”な宇宙像と認識論理が刻印されているように思われる。

宣長は「高天原」とは「天」であり、そこは「天ツ神たちの坐す御国なり」と説いている。かれは新井白石に代表されるような当時の euhemerism (神話を史実とする読み方)を退け、垂直的、立体的に『古事記』を読む、とはいえ、その神はキリスト教におけるような超越者ではなく、松本滋に従えば、神と人とは「心情的」かつ「系譜的」にもつながったもの、「生み・生まれる」いわば「親と子の関係」にある。これはむろん柳田国男の「神」及び“国民は天皇の赤子”とする考え方と同じである。松本氏はこのモデルが、宣長の身分上の「上」と「下」との政治論にも対応していると言っているが、そればかりではなく、かれの“生きられた家”(多木浩二)にもっともよく表象されている。

その四畳半は「高天原」であり、「上」である。宣長は密室で神々の沈黙を生き、「天の浮橋」ならぬ自在な階段を降りて、下々の世界に

降りたつ。私の解釈では、八段のうち五段目までは天上に属しており、下の三段は地上のものである。注記すれば、この三段は商家特有の収納家具でもある箱階段となっており、紙くずを入れたということだが、そうだとすると商家に生まれ商人を嫌った宣長の心の偏狭が認められるかもしれない。宣長はまた「もののあはれ」などを説くとき、必ず「わきまへしる」ことを主張するが、この分別も三段目においてである。

市井の中にひっそりと。しかし断乎たる宇宙を作る宣長。天明の不安な社会の中で壮年期にあり、学問上は完成期に入ったかれにとり、これは避難所である以上にその思想の端的な実現であったように思われる。決してそれは人里離れた山林でも、また離れのような様式であってもならなかった。都市の<内>なる<内>。しかも中空の一角であることが必要であった。お



図に示した点線の土間の部分及び釜の段と称された部屋の上に宣長が名づけた「鈴屋」と呼ばれる書斎がある。

(3ページより続く)

目標を得ることができたのである。そしてこれからいろいろな書物に出会うことだろうが、

そらくその一角では『源氏物語』は沈黙のうちに内面のロマンとして読まれた。なお、藤村の『夜明け前』には「生き神」宣長が夜な夜な階下の下女の寝部屋にしのび込むという話がある。下女は光源氏だとは思わずに厭とばすのである。ところで、例の「光GENJI」だがこちらの方も寝た子を起こして親を困らせる。

【参考文献】

- 城福勇『本居宣長』(人物叢書) 古川弘文館 1980
- 松本滋『本居宣長の思想と心理』 東京大学出版会 1981
- 前田愛『都市空間のなかの文学』 筑摩書房 1982
- 多木浩二『生きられた家』 青土社 1984

本居宣長旧宅 (三重県松阪市)



右手2階が鈴屋

きっとまた素晴らしい思想に触れ、感銘することができるだろうと思っている。

資料紹介

「光明」 日本最初のカトリック週刊紙

「光明」は1916(大正5)年1月、札幌で創刊された。カトリック系の週刊新聞としては日本最初のものであった。途中15年戦争期の長い休止があったが、1945(昭和20)年12月には復刊され、1968(昭和43)年末まで発行された。今回同紙創刊時の1年分が購入されたのを機会に簡単な紹介を試みたい。しかし、掘るべき資料が少ないこと、および当館に所蔵するものは全体の3割程度にすぎないため、不明の部分が多いのは残念である。

聖公教会が或は教育或は説教等に力を竭すも、要するに、此等の点に於て信徒各自を補助せんが為めのみ、されど、之等の事のみにては、未だ以て足りりと云ふべからず。況んや多くの信徒にありては、自宅より教会に至る道程の遠隔なる為め、或は又種々の故障の為に、屢々御堂参拝をすら妨たげらるるに於てをや、されど天主の御言は、之れが故に一日も忽にし、片時も疎すべきにあらず。何となれば肉体に營養分の必要なる如く、靈性にも又營養分は必要欠くべからざるを以て也。此に就て予は聊等に幾分補助ともなるべき一つの工夫を編み出しぬ。そは他ならず、来月以降当方に於て極めて簡易なる定期刊行の読物を発行し、之れによりて、幾分聊等が宗教的教養の不足を補はんと也。

これは「光明」予告号(1914(大正4)年12月25日刊)掲載のキノルド札幌教区長回章中、同紙創刊の意図について述べた部分である。では、なぜこの時期に北辺の地においてこの企てがなされたのだろうか。G. フーベル師は「フランシスコ会北海道布教小史」にこう書いている。

戦争(第1次世界大戦)中は旅行が制限されたために、宣教師たちは、信者や求道者のために、前ほど外へ訪問に出かけることができなくなった。それで多少口に教える

代りとし、かつ信者たちの手に少し宗教的読物を与えるため、日曜日発行の週刊紙を創刊しようという計画が熟した。

その意味では「光明」は「戦争の落し子であった」という。また、同年(1915)春、札幌知牧区が創設され、フランシスコ会の布教活動が本格化したという事情もあったであろう。

「光明」の内容は福音書講義、公教要理講義、聖書物語、教会史、聖人伝、聖公教会の儀式典札習慣、読者相談など主として宗教的読物であり、ニュース性は希薄である。無署名記事が多く、執筆者を特定できるものは少ない。編集者としては、ダヴィド・ミバク(美伯梁人)、A. ヒップ、D. シリング、H. ノル、武宮雷百師らの名が挙げられる。

体裁はB5判8ページ建て5号活字3段組総ルビ付。多数の読者を得るため、購読料は印刷費の実費程度とし、当初は1部2銭であった。それでも購読料の支払いは順調ではなかったらしく、早くも第9号に未納入者に対し至急支払われたしの社告が出ている。フーベル師によれば(初期の?)発行部数950、その中購読料の払い込まれたのは600部あまりにすぎないという。

発行所は一般に光明社とされる。同社の設立は1915年、1916年の2説あるが、前者は「光明」予告号、後者は同第1号の発行日を充てているらしい。しかし、刊記にみる発行所は予告号から3号まではフランシスコ会、4号から53号ま

では光明発行所となっており、どこにも光明社の名はない。昭和4年1月の659号には光明社とあるがこの間の所蔵がなく、光明社の名称の初出は確認できない。思うに、「光明」発行のために修道会内に担当部門が作られ、事業の発展とともに独立したのが光明社ということなのだろう。光明社はその後、聖歌集、ミサ典書、ヴルガタ版最初の全訳旧約聖書など、日本カトリック史上に残る出版活動を行って今日に至っている。

1931(昭和6)年6月、「光明」の発行は突然中止された。その事情についてフーベル師は次のように書いている。

1931年3月8日、9日両日には、東京でカトリック出版社の総会議が開かれ、(中略)日本全国を対象とする週刊の宗教新聞発行の件が決定されたが、(中略)従来発行されていたいくつかの雑誌や月刊新聞は、この新企画を遂行するため、廃刊した。それによって新しい週刊新聞のために、多数の購読者を確保しようというのである。我が週刊紙「光明」もこの理由から、同年6月末を以て、発行を中止した。

新しい週刊新聞とは現在の「カトリック新聞」のことである。いわば外圧による中止に対し関係者は不本意の念なしとしなかったであろう。しかし、符節を合わせるように始まった長く暗い15年戦争をこえて、1945(昭和20)年12月2日特降節から「光明」は復刊された。復刊当初は当時の用紙事情によるものであろう、4ページ建て月2回の発行となっていた。その後、1947(昭和22)年1月からは8ページ建てに、1952(昭和27)年1月からは週刊に復している。

しばらく順調な発行が続いていたが、1968(昭和43)年12月15日付1746号に次のような挨拶が載った。

愛読者のみなさんに

つたない編集ぶりにもかかわらず、このささやかな週報を、長年にわたりご愛読下さいましたことを、まず心から感謝いたします。

「光明」は実にわが国カトリック教界最初の週報で、カトリック新聞が創刊されるまでは、週刊紙として唯一のものでした。なにぶん中央を遠くはなれた地方での出版なので、地理的条件からもすでに不利を免かれなないと、しばしば注意されながらも、いままで屈せず刊行を続けて参りましたが、編集・印刷面に種々困難が生じ、かつ送料も年々高くなり、普通雑誌と同じ扱いの郵便料金を徴集されるなどで、採算がとれなくなりましたので、遺憾ながら今月を最後として廃刊することにいたしました。(以下略)

かくして「光明」は同12月29日付の1746号を以て廃刊された。「カトリック新聞」は翌年1月19日付2067号の第1ページで、そのことを小さく論評抜きで報じた。

[参考文献]

- フランシスコ会北海道布教小史 1-17 ゲルハルト・フーベル著 光明1173-1186, 1188-1190各号付録連載 1957
- フルダから札幌へ カトリック北11条教会創建75周年記念 同教会 1984 190.21/Ka86
- 北海道とカトリック 戦前編 仁多見巖編著 同出版委員会 1983 190.21/N88
- 北海道とカトリック 戦後編 仁多見巖編著 光明社 1987 190.21/N88-1
- 日本キリスト教歴史大事典 教文館 1988 R/190.21/N71

◎本誌33号に誤りがありました。お詫びするとともに、右記のように訂正いたします。

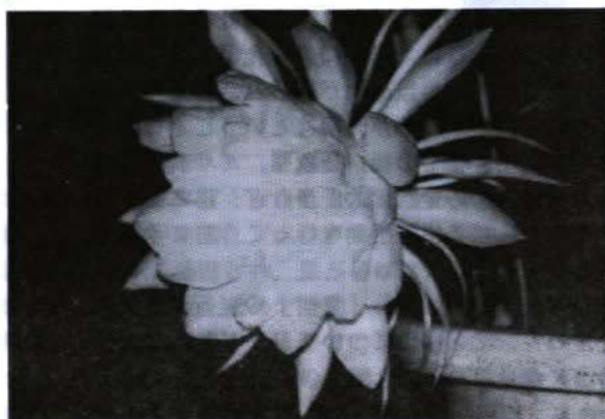
8ページ 17行目 季奇せ → 季奇せ

~~~~~ 藤に咲く花 12 ~~~~~

ケッカビジン 月下美人

*Epiphyllum oxpetalum* (DC.) Haw.

英名 Dutchman's-pipe cactus



幻想的な一夜花を咲かせるサボテン。クジャクサボテンの一種で、月下香、月来香などともいわれている。原産地はメキシコからブラジルの森林。葉も、サボテン特有のとげもない。古茎は樹木状に木質化し、高さ3mに育ち、多数分枝する。コンブ状の若い茎の刺座という部分

から、夏から秋に数回、乳白色の大輪の花を咲かせる。夕方から開き始め、9時過ぎに満開になり、夜半を過ぎるとしぼみ始め、翌朝には完全にしぼんでしまう。しぼんだ姿は夜とは別人のように衰れである（開花時を撮影したカラー写真は閲覧室貸出カウンターに展示中）。強い芳香があり、南フランスでは香水の原料として栽培されている。花はオクラのようなぬめりがあり、三杯酢にしたり、豚肉と炒めて食用にできる。花ことばは、夜に咲くことや香りたかいことに関連して「危険な快楽」(英)、「きみはきわめて優しい感情を呼びおこす」(仏)などである。

参考資料 『平凡社大百科事典』 1984 031/H51

『花ことば 花の象徴とフォークロア 1』 春山行夫著 平凡社 1986 627/H34 /1

写真撮影 公仕室 浦田涯

卒業される皆様へ

在学中は図書館をご利用くださり、ありがとうございました。大学生活の思い出の一コマの中に、図書館での思い出も——必死でレポートや卒論を書いたこと、おしゃべりをして注意されたことなど——なにかできましたでしょうか。

図書館は卒業後も在学時とほぼ同様の条件で利用することができます。シェイクスピアや紫式部、サリンジャーや村上春樹はいつでもあなたを歓迎します。何か調べたいことができた

きも、母校の図書館を思い出し、遠慮なくご利用ください。入館の手続きは簡単です。ただし、貸出を希望される場合は、身分を証明するものが必要です。詳しいことは係にお尋ねください。

◎後期試験期および春季休暇中の図書館の開館時間、休館日等につきましては、掲示をご覧ください。

藤女子大学 図書館 だより 第34号 1989. 1.16

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館  
TEL 011-736-0311(代) FAX 011-709-8541(大学庶務課)